



視聴覚教育委員会では昨年度から、土木技術者の教育ならびに土木技術の普及を目的に、大学・高等専門学校・研究機関そのほか公共機関等との共催、協賛あるいは協力といった形で、土木技術映像の一般公開に取り組んできており、港湾技術研究所の主催のもとに以下の4作品を上映した。なお、一般公開では、ビデオ上映会のほかに、世界最大規模を誇る三次元水中振動台やスネーク型多方向不規則波造波装置(デュアル・フェース・サーベント)をはじめとする8か所の研究施設で、各種の研究活動の状況が、来訪者に公開された。

【上映作品】

- ・防波堤の新時代を拓く二重円筒ケーソン式防波堤
- ・ベイエリアの新しいモニュメント鶴見つばさ橋
- ・蘇った秋田港
- ・自然と技術が融合けう港～200人の挑戦～

(運輸省港湾技術研究所 企画部研修資料課専門官 視聴覚教育委員会 委員兼幹事 菊地正剛)

「若手地震工学研究者の会」 第16回セミナー開催

N E W S

「若手地震工学研究者の会」の第16回セミナーが7月27日～29日の3日間、東京都三宅島において開催された。台風の影響で交通路の確保が難しいなか、土木、建築、地球物理、地質などの幅広い分野から約50名の参加を得て、11名の会員による最近の研究成果の発表、活発な討議が行われた。また、東京大学地震研究所火山噴火予知研究推進センターの及川純博士による特別講演、三宅島の見学、今年3月と5月に起きた鹿児島県北部の地震に関する情報交換会と盛り沢山の内容であった。



会員の発表としては、千葉県地質環境研究所の風岡、東電設計の山本、鉄道総研の上半、大成建設の岡本、東大地震研の境、東京電力の植竹、大阪土質試験所の宮腰、東大生研の目黒、運輸省港研の野津、京都大学の盛川、山下の各氏から話題提供があった。特別講演では、及川博士より、翌日の見学会の予習をかねて、「1983年の三宅島噴火と火山噴火の基礎モデル」と題した講演があった。

見学会では、及川博士の案内で噴火に関する地点を含めて島を一周した。なかでも、1983年の噴火の際に溶岩に襲われた中学校がそのままの姿を残しているのが、印象的であった。

本会は、出身分野にとらわれず地震工学に関わる若手の人たちの親睦を深め、相互の情報交換と議論の場をもつことを目的に1983年に結成された会である。会員は、大学・官公庁・民間各方面の地震工学に携わる若手(40才未満)の研究者約80名から構成されている。本会では、毎年夏にセミナーを開催し、学会とは違った雰囲気の中で形式にとらわれない自由で活発な議論の場をもっている。本会に参加を希望する方(ただし35才以下)は事務局まで連絡を。

事務局：運輸省港湾技術研究所 野津 厚
Tel: 0468-44-5030, Fax: 0468-44-0839
E-mail: nozu@ipc.phri.go.jp

(清水建設株式会社 技術研究所研究員 片岡俊一)

「淡路島のまちづくりを考える シンポジウム—震災・復興・そして未来—」開催

N E W S

先の阪神・淡路大震災では、淡路島の震災地域に大鳴門橋でつながっていた四国から、徳島大学をはじめ多くの土木学会会員が、調査やボランティアに協力した。特に建物被災調査では、徳島大学のグループが大阪大学や地元住民団体「淡路島環境会議」とともに参加し、その後のまちづくりに関する調査研究を共同で行ってきた。

こうした経緯から土木学会四国支部では、淡路島環境会議との共催で震災復興後のまちづくりのあり方を考えるシンポジウムを8月24日、淡路島洲本市で開催した。地元一般市民に加え、建設、行政の関係者、さらには四国、関西の専門家など約70名の多彩な参加者を迎え、淡路島環境会議代表の湊格氏、徳島大学教授山中英生の2名による共同開催の経緯説明で始まった。

第1部は、震災・復興・未来の視点からの大学関係者の発表が行われた。

第2部では、「淡路島のまちづくり—集落・小都市 淡路らしさを目指して—」と題してパネルディスカッションを行った。

議論の内容については、学会誌1月号の支部のページにて詳しくお知らせする予定である。

(徳島大学 工学部建設工学科教授 山中英生)



JSCE NEWS の募集

新鮮なニュース・トピックスの投稿を歓迎します。
ニュース記事の扱いについては、編集委員会にご一任下さい。
文章量は1200字(写真1枚程度含む)です。

送付先：土木学会事務局編集課
E-mail: jsce-tak@po.ijnet.or.jp
F A X : 03-5379-0125